

中国人の生き方—そのたくましさ、日本人とのちがいは

下定雅弘

はじめに

中国人の生き方というのは、ずいぶん大きなテーマで、これはもちろんいろんな角度から問題にすることができる。たとえば、中国人は度量が大きいとか、物の見方が多面的であるとか、あるいは、大阪人と似ているとか…

わたしが、この文章で述べたい中国人の生き方というのは、その生きていく上でのエネルギー・たくましさについてである。

それは、例えば、陳凱歌『私の紅衛兵時代—ある映画監督の青春—』(講談社現代新書、1990. 6)に、「私は文革が終わってから恨み言を書き連ねた「知識青年文学」を読むたびに、書いた連中は一人の人間を二度殺しているとおぼやいたものだ。辛く厳しい生活など、中国の庶民には当たり前のことだ。私の心を揺さぶるのはそんなものではない。力強さだ(傍点、下定以下同じ)」という言葉で実感できるたくましさである。

これは、私自身が、中国文学を専門にして、とにかく40年以上、中国と中国人とつきあってきて強く実際に感じていることである。実体験と、古典に記され、また近現代にあった事実とが全て合わさって得られた認識である。

中国人のたくましさはどこから生まれてくるのだろうか?この問題を考え、同時に日本人の我々の生き方をも考える糧にしたい。

陳凱歌の言っていることとは少しちがうが、これを別の角度から補うと、なかなか言い方が難しいのだが、中国人は徹頭徹尾自分を大事にする、自分と自分の身内を大事にする、もう少し進めると、自分及び自分と関係の深い人以外は、どうでもよろしい、自分たちが生き抜くことができればそれでいい、という、そういう面でのたくましさ、大変強くあると思う。

中国に行って、普段から関係のある組織の接待などを受けていると、その接待をしてくれる人達が、我々に本当に親切なのに関心する。ところがその同じ人が、関係のない他人には驚くべき冷淡さで接している。「無い」「知らない」の一点張りで、いくら困っていてもまったく気にしない。そういう経験は多くの方がされていると思う。中国の女性は、自分が好感を持っている男性に対しては、実にやさしいとろけるような言葉と態度で接する。けれども、関係のない人間に対しては、唾でもはきそうな態度で実に冷淡である。

日本人も、またどの国の人間であっても、自分と自分の身内が大切には違いがないけれ

ども、こんなにはっきりと身内と他人とを区別して、自分たちの利益を追求していく、そういう生き方はしないと思う。むしろ、日本人の場合には、他人と自分との関係を穏やかに保つことによって、自分の利益をも保護している、また保護できるという、そういう特徴があるように思う。

中国人はそうではない、自分および関係のある人間と、そうでない人々とを峻別し、そして、自分たちの特に家族の利益を徹底的に追求する、この点で、大変、突出したたくましさを持っていると思う。

このたくましがどこから出てくるのか、私は主に二つの面から、説明してみたいと思う。

それは、第一に、国家の無慈悲・恣意性ということであり、第二に、家族(血族)至上主義である。一方で、国家の権力の猛烈な強さと圧力がある、この圧力に堪え、これをしのいでいかなければならない、一方で、家族、血の通った身内が自分の生命そのものだという彼等の身心にしみこんだ思想と感情がある。権力の無慈悲・恣意性に屈することなく、なんとしても家族は生きぬいていくのだ。ここから、中国人の生き方のたくましさが出てきていると見る。

1 国家の無慈悲と恣意性

まず、第一の国家の無慈悲・恣意性について。

無慈悲というのは、皇帝の権力への執着により、権力の保持のためにはどんなことでもなされるからである。恣意性というのは、その基準が法律や公的な規則にあるのではなく、皇帝個人の恣意的な判断によるからである。

1の1 皇帝の権力への執念とその貫徹

中国の皇帝は、自分自分の一族の権力を確立するために、そのために益があることは何でもやってきた。皇帝(あるいは皇后)の意図次第で、臣下と民の運命は翻弄される。現代の問題とも関連する二、三の例を挙げよう。

①漢の韓信の死

中国では創業の功臣はしばしば殺される。いや、それが普通だといってもいい。

「韓信の股くぐり」で有名な韓信。彼は創業の功臣だが、高祖に殺されて生涯を終える。韓信は項羽を見限って劉邦に仕えようとし、蕭何の推挙で一挙に劉邦の大將軍に任ぜられ、

齊を平定して齊王となる。しかしその功績が短期間に余りに大きいので、劉邦は不安を抱く。齊の蒯通^{かいとう}は韓信に、劉邦・項羽と天下を三分する計を教える。韓信は断るが心に迷いが生じる。劉邦は韓信を殺すことを決意する。韓信は危険を避けようと、項羽の將軍だった鍾離昧^{しょうりまつ}の首を持って漢王にご機嫌うかがいをした所、捕えられて淮陰侯に落とされる。この時の言葉が「狡兔死するや、良狗亨らる。高鳥尽くるや、良弓蔵す。敵国破るや、謀臣亡ぶ（すばしこい兎が殺されたあと、良い獵犬は煮殺される。空飛ぶ鳥がとりつくされると、りっぱな弓はしまわれる。敵国が破滅すると、謀臣は殺される）」というものである。前197年、陳豨^{ちんき}が反し、高祖(劉邦)が自ら討とうとした時、病と称して従わず、呂後の計略で捕らえられて、斬に処せられ、韓信の三族(父母・兄弟・妻子)も全員処刑された(『史記』卷四十一「淮陰侯列伝」)。

韓信が殺されたのは一例に過ぎない。漢の創業の功臣はそのほとんどが殺された。匈奴に降ったもとの韓王信は將軍柴武に攻められて斬られ、梁王彭越は謀叛の名によって一族尽く誅殺される。これを見た淮南王英布は危険が身に迫るのを覚って反乱するが、高祖は自ら出陣してこれを破り英布を殺した。こうして高祖一代のうちに、劉氏一族以外の異姓の諸侯王はほとんど全て滅ぼされ、「劉氏にあらざる者は王たるべからず」という漢代諸侯王についての不文律が確立したのである(西嶋定生『秦漢帝国』[中国の歴史第二卷、講談社、1974. 7]を参照)。

②唐の則天武后による誅殺

武后、その父は高祖の挙兵に参加して荊州都督になっていた。14歳の時、高祖に美貌を認められて後宮に。帝の寵愛と、王皇后・蕭貴妃の反目を利用して、やがて王氏に代わって皇后になる。以後、王氏を支持する貴族官僚を誅し、王・蕭二氏を殺し、皇太子を廃して実子を立てる。病身の高宗に代わって朝政を独裁。高宗が死ぬと、唐の宗室・功臣を殺し始め、三十年にわたる執政で、唐室の一族をほとんど除き去ってしまい、690年ついに周王朝を立てる(『旧唐書』卷六本紀「則天武后」)。

③明太祖の肅清

1368年、朱元璋は元を滅ぼして帝となり、明王朝を立てる。太祖朱元璋の同郷の出身の丞相に胡惟庸という男がいた。太祖の信任をかさにきて専横多く、自分を非難した劉基を毒殺する。ついに同志と結んでひそかにモンゴル・日本と連携して、明をくつがえそうとはかった。

1380年、太祖はこれを大逆事件として処罰。罪に問われたのは1万5千人といわれる。

太祖はその禍の因が宰相制度に在るとして、これを廃止。帝国を一家の私物にしようと考えて、皇帝の絶対権力を維持する制度を確立した。中書省はなくなり、吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部は独立して、それぞれ皇帝の直轄とした。さらに全国を5つの軍管区に分け、その統括機関を都督府とし、五軍都督府がやはり皇帝の直轄となった。また元の時代の地方分権的な性格を除いて中央集権制にくみこみ、全国を13省に分けた。この長官も皇帝の直属である。

1384年、武勳第二の曹国公李文忠が毒殺される。朱元璋の甥である。たびたび、帝をいさめて不興を買ってきた。1385年、武勳第一の魏国公徐達が毒死する。朱元璋の挙兵以来の片腕で開国の元勳だった。1390年、胡党の獄とよばれる第2次の粛清が行われる。文臣筆頭の李善長をはじめ、侯伯の武将を含めて刑死したもの3万人。理由は彼等が十年前の胡惟庸の事件に関連があったというものである。続いて第3次の粛清。モンゴル討伐に偉勳ある猛将藍玉を中心に、殺されたもの1万5千人。その理由は、首将の藍玉が従軍の際に財宝を盗み、元主の妃と私通したというものである。

この数次にわたる粛清（計6万人を処刑）により、(元から)中華の回復への大業をたすけた元勳長老はほぼいなくなり、帝国の政治と軍事の支配権は朱一家が独占した(三田村泰助、世界の歴史14『明と清』、河出書房新社、1990.1に拠る)。

1の2 皇帝権力の末端への貫徹—その制度の確認—

中国で、上に述べたように皇帝が絶大な権力を持ち、権力をふるうことができるのは、それが制度によって保証されているからである。以下、初歩的なことだがそのシステムの確認をしておく。

1の2の1 皇帝の強大な権力を保証する中央集権制

【支配の体制—郡県制と科挙制度】

「郡県制」は「封建制」に対立する統治制度である。「封建制」は、天子の一族または功臣を領主に封じ、世襲的に支配させる制度を総称したもの。殷・周の時代、特に周公が立てた西周の統治組織がこの代表的なものとされる。

これに対して、「郡県制」は、封建制に対する地方支配の方法。秦の始皇帝が、天下を統一し、土地を全て天子の直轄とし、これを郡・県の行政区画に分け、中央政府より官吏を派遣して治めさせる中央集権的な行政制度を始めた。これを指す。中国は、宋以後は、特

殊な例を除き郡県制である。

この両者の中間に位置する制度に郡国制がある。これは漢代の地方制度で、郡県制と封建制を併用したもの。漢の高祖は秦の滅亡に鑑み、また統一に功績のあったものを優遇する意味から、首都長安を中心とする政治経済の中心地域と、西北の軍事的に重要な地域は、直轄地として郡を置く一方、関中以東および南の旧六国の故地には一族功臣を分封して皇室の藩屏とした。しかし、高祖はこれら王国が独立した実力を持つことを恐れ、徐々に巧妙な手段で(あるいは強行に……上に述べた)王国の取り潰しを行い、高祖末年には、異姓の王国はほとんど取り除かれた。残る劉氏一族の王国も、文帝・景帝の間に圧迫が加えられ、これに抗して呉楚七国の乱が起きたが、わずか3カ月で平定され、乱後、王国の権力は大いに削減された。さらに武帝は、各種の禁令により王国の力を削ぎ、その結果は郡国制とは名のみで、じつは郡県制と変わらなくなった(京都大学東洋史研究室編纂『東洋史辞典』に拠る)。

この中央集権制を支える基礎となったのが科挙制度である。

科挙の本質は、貴族の力を弱め、天子の専制独裁を達成しようとするところにある。「歴代の天子は、分権的な封建制の遺風を改めて中央集権を確立するのが念願であった。六朝時代の貴族制に一大弾圧を加えた隋に科挙制が樹立され、ついで唐代に新たに興隆した新貴族群が、再び社会より落伍し没落し尽くした宋代になって、始めて科挙が官吏登用の正系と認められるようになったのは偶然ではない」、「科挙は、天子の中央集権を輔佐する制度である」、「科挙は、漢に淵源し、隋に興り、唐に盛んに、宋に成」った(宮崎市定『科挙史』、東洋文庫、平凡社、1978.6。元来、1946年、秋田屋書店から『科挙』として出版されたものを、補訂復刻したもの)。

唐代は、貴族出身の恩蔭による官僚層(任子)と、下級中級士族出身で科挙を通過した新興官僚層(挙子)との、終には後者が勝利する所の長い長い戦いの時代と見る事が可能である(陳寅恪『唐代政治制度史述論稿』に拠る)。唐では、なお封建制と郡県制がまじりあうシステムだったが、宋以後は完全な郡県制(中央集権制)である。同時に科挙制度が完成し、中国は、世界に比類ない皇帝を頂点とする中央集権制官僚制国家となった。

1の2の2 日本との比較

中国では、科挙は天子を頂点とする中央集権制の官僚システムを支えるものとして発展し、確立した。日本でも、大化の改新以後、豪族・貴族の勢力を取り除き、天皇の力を強

め、天皇の下に天下統一を進めようとする動きがあった。この時、天子を頂点とする中央集権体制を保証するために作られた唐の律令をまねて、日本でも天皇を中心とする統治体制を整備しようとした。しかし、その規定は次第に形式化して、ついに日本では科挙は定着しなかった。その原因は、中国と日本の社会体制のありようの違いにある。

中国は、天子を頂点とする中央集権体制により統治することが、二千年を越える歴史における基本的なありようである。豪族・貴族の力が強くなり、天子の力が弱くなって、中央集権体制がうまくはたらかなくなることも度々あったが、しかし、いつも天子を頂点とする中央集権体制にもどるといふ反復を繰り返してきた。西周は封建制によって統治した。秦では始皇帝が中央集権体制を確立。漢は、始めは封建制と秦の郡県制を統合した郡国制を採用したが、やがて郡県制、つまり天子を頂点とする中央集権体制にもどった……というように、歴史の早い時期にこのパターンを見ることができる。

科挙という試験制度は、この天子を頂点とする官僚システムを支えるために必要不可欠だった。科挙制度は天子の権限を強化するとともに、その制度自体も徐々に強固なものに完成されていった。そして、ついに清朝末年まで中国の政治体制を支える基本的なシステムとして機能し続けたのである。

一方、日本では、長い歴史において、官僚システムというものは、ほんの一時期を除いては形成されなかった。大化の改新以後、天皇の力を強めようとして、中国の体制をまねて統治しようとした時期がある。しかし、まもなく豪族・貴族が実権を握り、統治する体制にもどってしまった。中央では少数の名門貴族が政治の実権を握り、地方では土着の豪族が統治するというのが、基本的な体制である。

奈良時代。天武天皇から始った律令国家の体制が機能して、天皇が中心となって統治していたが、聖武天皇(藤原不比等の孫)のころには藤原氏が大きく勢力をのぼし、仲麻呂の時には実権を掌握するために新たな機関と官職(紫微中台・紫微令)を設けるまでになった。他に、大伴・佐伯・多治比といった古来からの名族もいたが、天皇家の外戚であり、天皇を後ろ盾として力を持った藤原氏にはかなわなかった。

平安時代。藤原氏がほとんど全ての実権とポストを握り、他に橘氏や源氏といった、少数の貴族たちが事実上、日本の政治を仕切っていた。摂関藤原氏の権力と地位は、天皇のそれを凌駕するほどであり、天皇は彼等の地位と権力にお墨付きを与える存在に過ぎなかった。

鎌倉時代。武士豪族が地方で実権を持ち、その中で一番力の強かった源氏が国家を統治

した。頼朝は、天皇の宣旨により東国の行政権を与えられ、東国の新政府が成立した。また、頼朝は右近衛大将のポストを賜った。しかし、彼はすぐに辞任し、征夷大將軍のポストを求めた。後白河法皇(時の天皇は後鳥羽天皇)は頑強にこれを拒んだが、法皇が死ぬと、頼朝は征夷大將軍に任じられた。このように、天皇は彼らにとって国家権力の掌握を正当化するための役割を果たす存在に過ぎなかった。

戦国時代を終結させたのは、三河の地方豪族徳川家康であり、天皇はやはり、征夷大將軍の任命や武家官位制の官位授与権という地位を与える存在でしかなかった。以上、臚谷寿『藤原氏千年』(講談社現代新書 1322、1996.9)・『日本の歴史 9 鎌倉幕府』(大山恭平著、小学館 1974.8 初版)等を参考にして、私なりに、中世までの統治体制の推移を、ごく荒く素描した。

江戸時代。地方の要所要所は親藩に治めさせ、その他の大部分は土着の豪族に引き続き統治させた。また近年の研究により、江戸時代の將軍の権限は、従来思われていたほど強大ではなく、各藩がかなり高度な自治権を持っていたことが明らかにされている。土地は大名が所有している。また江戸幕府の権力が、藩の人民の命までも左右したのではない(結論めいたことをいえば、日本の場合、たとえば、徳川將軍の気分次第で、備前や薩摩の末端の人民の生命が、一瞬で左右されるということは考えられない)。ここから、庶民にとっては、自分が住み暮らし、所属する地域内での和を保つことが、生命を保証する上で一番大事なこととなった。逆に所属の地域・社会からはじき出される「村八分」は死を意味したのである。

以下、江戸時代のこの問題につき、法令・裁判に注目し、主として、藤井讓治編著『日本の近世』(中央公論社、1991.11)を参考にして記す。

法令について。江戸幕府の始め頃、法度は「老中奉書」として、…個々の大名への命として出され、庶民に直接向けられた形式をもつ法度としては出されていず、そこには大名の裁量の可能性をなお残している」(25頁)。「幕府法度は、大名の領内支配の法としてすべてを定め、あらゆる面で機能したのだろうか。答は否である」(30頁)。大名にとって幕府の法度には原則として従わねばならなかった。しかし、大名は、軍事編成、支配のための諸役人、家臣の知行制、相続法、衣服の制、土地制度、年貢収納、運上、領内の裁判、刑罰、風俗統制、儉約などきわめてひろい範囲で独自の法度を定め、領内支配を行った。」(32頁)

このように、江戸時代、諸藩は、基本的に、あるいは通常、藩が独自に定める法令によって、領内支配が行われていた。

裁判について。「幕藩体制の下での政治秩序の原則では、大名領国内の「仕置」、すなわ

ち政治・裁判の問題は大名家（藩）に委ねられ、将軍（幕府）はその内政に干渉しない不介入の立場をとっていた」（76頁）。「この原則は刑事問題については、1697年の「自分仕置令」で、より拡大されて確定した。すなわち、一万石以上の大名の領内の刑事事件については、獄門・火罪の極刑にいたるすべての刑事事件について、その吟味権および刑罰執行権のすべてについて、幕府の許可を経ることなく行使することが認められた」（76頁）。裁判は、各藩の裁量で行われたのである。

貨幣についても諸藩は独自の貨幣を持つことができた。「…全国各地の大名領における領国貨幣の存在と、幕府の慶長金銀貨による幣制の統一の断念という事態は、それぞれの領内の金銀山に対する大名の領有を前提としなければ、理解できない」（85頁）

こうして、中国と日本の統治システムを比較すると、ずいぶんちがう。中国では、皇帝の命令が、また皇帝のわがままが、そのまま最末端の人民の生命に直接影響してきた。そして、それが保証されるようなシステムになっていたのである。

日本の天皇は中国の天子のように実権を持たず、ほとんどいつも祭祀儀礼の実行者であり、天下統合の象徴にすぎない。こうして、天子を頂点とする官僚システムが形成されなかった明治以前の日本では、それを支える人材登用システムである科挙制度が定着しなかったのは当然である。社会体制の本質的なちがいが、日本に科挙を定着させなかった原因である。

明治以後については、概括することが困難である。ここはごく簡単に、素人の印象を記すにとどめる。明治期、天皇は長ずるにしたがってかなり直接に政治に関わるようになっていく。しかし、一方で、内閣および国民議会の形成は進められており、政府と天皇との関係は時により変化するにするとしても、天皇を実質の頂点とする中央集権統治が行われたことはないようだ。

一方、国家主導の統治を実現するために、日本では帝国大学の創設により、国家官僚の育成が図られ、官僚主導の統治が発展した。

昭和に入っては、軍国主義の時代となり、敗戦に向かって、日本は軍部を頂点とする不幸な中央集権体制に走っていく。

戦後の日本は、その復興をめざし、長期間にわたって中央主導による、政治・経済の運営を続けてきたが、高度経済成長の時代と・バブル期を経て、しだいに地方主権の動きと声が高まっているように見える。

何にしても、日本は、古代から今日までのほとんどの時期において、天皇もしくはそれ

に代わる強大な権力を頂点とする中央集権国家であったことはない。

1の3 昔のことは今のこと

中国にもどろう。そんな昔のを持ち出して何だ、今と何の関係があるのかと思われるかも知れない。しかし、これが過去のことではないのである。以上に述べたことは、現代にも見られる。以下、21世紀の今、情報はやや古い、中国人なら誰でも知っていることを列挙しよう。

1の3の1 権力の実態

【権力者の特権】

皇帝とその近親者の特権について。毛沢東は現代の皇帝とっていい。彼は稀代の好色だった。好きになった女は、既婚でも別れさせて自分のそばに置いた。例えば、列車の車掌だった張玉鳳を自分の世話係にしている。

実力者の近親がどんなポストについたかを記す。鄧小平は、「末代皇帝」と呼ばれた。彼は、1949年冬、共和国成立後、貴陽・重慶・成都・雲南・西康を占領していた。中共中央西南局が発足すると、鄧小平は西南局第一書記に転任、中国西南部に君臨する「西南王」「西南の土皇帝」となる。45歳、1952年8月、中央に栄転するまで、鄧小平はこの地の最高権力者として重慶の軍政委員会の庁舎で起居。彼はこの権力を利用して、土地改革の時も一族の土地・財産を守った。

鄧小平の長男朴方（中国残疾人福利基金会理事長・中国残疾人联合会執行理事会理事長）は、障害者のために募金集めをして、それを着用しているといわれた。家の中では普通に暮らしているのに、外に出る時には車椅子を使うという噂があった。長女林は、北京画院芸術室花鳥画組責任者。次女楠は国家科技委員会科技局副局长、その夫は中国科学院局長、三女榕は全国人代国際関係室主任、その次男は駐米大使館勤務だった。

楊尚昆一族は「楊家将」と呼ばれた。かつて、自らは国家主席、中央軍事委員会主席。実弟楊白冰は人民解放軍総政治部主任。その娘婿遲浩田は人民解放軍総参謀長。楊白冰の息子は第27軍の軍長。楊一族で解放軍を掌握していた。

李鵬の息子李陽は海南経済開発公司副經理。

趙紫陽の息子趙大軍は海南華海公司總經理、四男梁一北は中国国際交流協会理事。父から秘密書類を見せてもらって海南島の土地転がしをしたり、白昼堂々と軍用機を使って「走

私」(密貿易)していたという。以上のポスト名は、串田久治『天安門 落書』(講談社現代新書、1990.5)による。

権力者がこのように甘い汁を吸えるのが常態である。ならば、人民にとって「走後門」(裏口から人間関係をつけて利益を得る)は当たり前。権力の無慈悲と恣意性を免れようとすれば、権力と関係を持つのが一番の近道である。「走後門」は、中国人にとっては人生の不可欠の知恵だともいえる。

【権力の貫徹のための政治の実際】

現代になっても、中国人は、中国が過去と変わらない国家であることを繰り返し体験してきている。国家のその時の権力者の力がどれほど強いものかということ、彼等は骨身にしみて知っている。これも、中国人なら誰でも経験し、知っていることを列記しよう。

以下、建国後のことは、小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』(岩波新書 336、1986.4)、竹内実『毛沢東』(岩波新書、1989.9)、矢吹晋『毛沢東と周恩来』(講談社現代新書、1991.10)、矢吹晋『鄧小平』(講談社現代新書、1993.6)、寒山碧著・伊藤潔訳編『鄧小平伝』(中公新書 879、1988.5)等に拠って記す。

[胡風批判]

文芸理論で独自の説を主張してきた胡風(1902~1985)に対する批判をいう。胡風は、毛沢東の延安での『文芸講話』が絶対という風潮の中で、これに反論していた。1955年5月、文学芸術連合会と作家協会から除名され、人民代表大会代表の資格も剥奪された。

[反右派闘争]

1956年1月。周恩来が演説、社会主義建設に対する専門家・知識人の役割を重視し、彼等に責任ある地位や仕事を与えるよう訴える。

1956年4月。これを受けて「百花斉放」「百花争鳴」が提唱される。

1957年2月。毛沢東は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」という演説を行う。この運動は、党の官僚化に対する反省とともに、建国以来の成果に対する絶大な自信に支えられていた。4月26日、整風運動に関する指示を出す。民主諸党派や知識人たちは、党の独裁に対する不満を鬱積させていた。党への批判は厳しさをまし、急速に非難や敵意の色彩をおびる。党はこれに驚愕し、全面反撃に転じる。

1957年6月8日。「人民日報」に毛沢東論説「これは何を意味するか」が発表される。以後、1958年7月にいたるまで、徹底した「右派」攻撃がなされる。著名な党員作家・芸

術家ら 7000 人が右派分子のレッテルをはられる。「右派は全人口の 5%くらいだろう」(毛沢東)。1978 年までに投獄された人は 11 万人以上。全部で 10 数万人が右派分子の烙印を押された。

これ以後、中国の知識人の思想は変わった。本音は絶対に口に出してはいけないと、知識人たちは固く心に誓った。国家と民族に対する素朴純粋な正義感の発揮は、これ以後、實際上不可能となった。正義感や真の愛国主義は、多くの知識人たちの魂の奥底に沈澱することになったのである。

西条正『二つの祖国をもつ私』(中公新書、1980.8)に次のように述べる。「…ちょうどそのころ、中国では、1957 年から 58 年にかけて反党言論ありとして右派分子にされた人々が次々と名誉回復しているということが新聞で報道された。その後その右派分子に対する審査は、ほぼ完了したという報道もあった。再審査というのは、1978 年春の党中央の決定に基づいて、30 万人とも言われている右派分子に対してその人の当時の発言がはたして反共産党・反社会主義的なものであったか、もう一度調べて、処分がまちがっていれば正し、名誉回復してやろうというものである。……私の養父(炭坑付属病院の院長だった)は、1958 年に右派分子の烙印を押されていた。……養父は、6 年間強制労働を強いられた。…強制労働を終えて帰宅した父は、町の幹部の紹介により、町工場に勤務。ねじを作るのが仕事。しかし、給料が少なすぎた。……家族は父と母と兄弟 4 人。暮らしていけない。日本へ移住を希望する。一家の移住は、認められず。そこで、形式的に離婚して、母は 4 人の子供を連れて日本に帰ることになる。離婚手続きの段になると、機関から、子供は 2 人を中国に残せと言い出した。……父一人が中国に残る。文革が起これ、臨時工の仕事もなくなる。職安で知り合った仲間と、毛語録を壁にかくアルバイトをする。毛沢東の絵をかくて売ようになる。……1968 年 9 月 9 日の夜、紅衛兵がやってくる。……逮捕されて、1979 年 7 月に名誉回復し、職場復帰するまで、11 年の刑務所生活」(90~94 頁)。

権力者による無慈悲はさらに続く。

[大躍進の失敗]

大躍進政策は毛沢東が提案したものである。この大失敗が、自然災害によるものではなく政策そのものの誤りであったことは、早く定説になっている。いま、これに関連して、中国の現代の統治システムについての言及を挙げておく。藤井省三『中国映画を読む本』(朝日新聞社、1996.5)はいう。「大躍進の失敗により中国全土で 1500~4000 万の餓死者が出たと推計され、犠牲者のほとんどが農民であったという。中国史は農民反乱の歴史でもあ

るが、大躍進期にはなぜ大規模な反乱が起こらなかったのだろうか。二つの理由が考えられよう。一つには、歴代王朝の直接支配が全国に1500～2000ある県レベルまでにしか及ばなかったのに対し、共産党政権は人民公社の下の生産大隊にも共産党支部を設け、自然村のレベルにまでその支配を貫徹した点である。……党支部書記が大隊の実権を握っていた。単純に計算しても、共産党政権は歴代王朝よりも百倍以上の密度で農民を支配していたといえよう」。

[文化大革命]

これを語れば、これだけで語りつくせぬ時間がある。今では、あの「文化大革命」というものが、毛沢東の権力の回復のための闘争だったことは常識となっている。彼には彼の理想が無論あったが、十年の大災難の本質は権力闘争である。毛沢東の復権のために12億の民が犠牲になった。

[天安門事件]

1989年6月4日の事件。これは、最近のことで詳しく述べる必要はない。民主化を求めて天安門広場に集まっていた青年たちが、解放軍の銃弾によって殺された。それがソ連崩壊直後の事であり、中国という国家の安定を優先すれば、あの決定はやむを得なかったと考える人は少なくない。だが、自国の軍隊による人民への発砲は、やはり鄧小平という現代の皇帝によってなされたのである。

以上、建国後の歴史の中での、政治権力の強大さを示す主な事柄を列挙した。

1990年2月、北京のある大学の先生の家に招かれたことがある。そこで、中学の社会の教員をしている娘さんが「文革」の時に農村に下放(幹部や知識人を農村や工場に送り、労働に参加させて思想改造を行う)された話になった。その時、娘さんは私にいった。「あなたたちには、わからない」。1993年8月、柳州で開かれた柳宗元学会に参加した時の、永州のある市民研究家の言葉。「中国の政治の圧力の強さは、あなたたちにはわからない」。

「あなたたちにはわからない」、私はこの言葉を、何度、中国人から聞いたろう。

1の3の2 現代における創業の功臣の悲劇

つぎに、古代における創業の功臣の処理、その現代版について列記する。

【毛沢東と彭徳懐】

解放軍総司令彭徳懐ほうとくかいは、1959年7月の廬山会議で毛沢東と激突した。彭徳懐は「山野の人」であり、終始「ゲリラ作風」を保持しており、「毛主席万歳」を唱えず、「東方紅」を

歌わず、「主席」と呼ばなかった。彼は当時は特に大躍進政策を批判していた。大躍進・人民公社運動は、毛沢東晩年の空想的社会主義の実践である。彭徳懐は、この総路線自体が誤りだとして、毛沢東を批判した。毛沢東は、7月23日、きびしくこれを退ける演説を行った。毛沢東演説を受けて彭徳懐の弾劾に会議の基調は変化する。毛沢東は、彭徳懐の^{うしろ}後にフルシチョフの影を見、ソ連修正主義の使者と錯覚。内外の修正主義という観念にとりつかれた毛沢東は、これを階級闘争として理論化し、やがて「文化大革命」に乗り出す。彭徳懐はその後、「文化大革命」で辛酸をなめ、ついに惨死した。

【毛沢東と劉少奇】

劉少奇は、周恩来とともに、毛沢東を支え、建国に功あった人物。ソ連留学から帰国後、党の政治指導を担当。人民共和国成立後は、国家副主席・人民代表大会常務委員会委員長を経て、1959年、毛沢東辞任の後を受け、国家主席に任命された。しかし、1966年以來の文化大革命で、「資本主義の道を歩む実権派」として激しく攻撃され、1969年10月の、中国共産党第8期12回総会で、国家主席および党のすべての職務を剥奪することが決議され、1969年4月の中共九全大会で、完全失脚が確認された。劉少奇は党籍を剥奪され、この年死去。劉少奇の連累者2万8千人。彼の名誉は1980年2月によりやく回復される。

劉少奇が国家主席に就任したのは、毛沢東の経済政策（大躍進や人民公社）の失敗による。毛沢東は、自分の権力が失われ劉少奇の名望が高まっていくことに不安を感じ、奪権闘争を開始、劉少奇の追い落としを計った。これが「文化大革命」である。

劉少奇に近かった鄧小平は、軍の実権を握っていたために、その党籍までは剥奪されず、長く南昌にひっこんでいたが、「文革」の終焉とともに再び登場。4つの近代化の旗をかかげて、中国の民主化・経済発展の総路線を敷いた。この彼を助けたのが、胡耀邦と趙紫陽である。

【鄧小平と胡耀邦・趙紫陽】

鄧小平は、1985年3月には、「天が崩れても胡耀邦や趙紫陽など天を支えてくれる人がいる」といっている。この時、胡耀邦が党総書記・趙紫陽は首相だった。ところが、民主化の動きが強くなってくると、1986年頃から、「ブルジョア自由化」に反対。1987年には、学生運動に軟弱な態度をとったということで、胡耀邦は更迭される。

趙紫陽は、市場経済を大胆に進め、民主化を達成しようとしていたが、彼も、1989年の6月4日事件を契機に失脚。6月23日には全職務を解任された。

1の3の3 権力の無慈悲と恣意性—中国人は法に守られていない—

ここでは中国人が、権力の無慈悲と恣意性に苦しめられてきた現代の実例を、手持ちの資料によって示す。

中国は、国際社会の一員として「罪刑法定主義」の国家たらんと、いま努力しつつある。けれどもそれは容易なことではない。このことがわかる資料を挙げよう。これも、最新のものではないが、私自身が、「朝日新聞」など普通の新聞の記事に拠って当時メモしておいたものである。

1993. 8/10 「南方日報」。深圳市不動産管理局の元局長が違法融資で賄賂を受け取り死刑判決。

1993. 8/13 海南省海口市の中級人民政府は、横領事件の主犯 5 人に死刑判決を言いわたした。判決を受けたのは元中国工商銀行海口支店の会計係、元海南遠洋貿易会社の副社長ら。職権を利用して手形を偽造、公金を横領した罪による。汚職、横領など、経済腐敗が蔓延、中央政府をはじめ、党、軍も腐敗一掃をかかげるが、効果があがっていない。死刑判決は、強硬姿勢の現れ。

1993. 8/21 江沢民総書記が演説、幹部の汚職をきびしく批判。

1993. 8/27 国務院次官を逮捕。中国最高人民検察院は北京長城機電科技産業会社の詐欺事件に関連して、政府次官を含む二十人を拘置。

1993. 9/11 福建で横領に死刑。福建省中級人民政府は、会社の貸金を横領・流用した貿易会社の職員と道路建設会社の職員二人に死刑の判決を言いわたした。また、広東省惠州市の中級法院でも、市公安局長が汚職で死刑判決を言いわたされている。

1993. 10/28 高級幹部収賄拡大。元市長ら三人処刑。北京市で県検察院検察長が収賄容疑でとり調べを受けていることが明らかとなる。

1993. 10/29 収賄罪で、河南省汝州市の元市長、広東省惠州市の元公安局長ら三人が処刑される。

1994. 3/4 長城公司事件判決。北京市中級法院は、長城公司事件の主犯潘太副会長に汚職・贈賄の罪で死刑の判決。北京長城機電科技産業公司が高い配当を餌に資金を集めた詐欺事件で、しかも国家科学技術委員会がバックアップしていたというもの。同社から賄賂を受けとっていた李効時前国家科学技術委員会副主任は懲役 20 年。

1994. 4/11 詐欺の元社長死刑。長城公司の元社長、死刑を執行される。

1994. 10/12 中共中央党規律検査委員会が、貴州省公安庁長の収賄をあきらかにした。収賄で逮捕された公安庁長は、外国人事業者を公安庁の職員に採用、身分証明書を発行したり、便宜をはかって、17 万元の賄賂を受けとっていたというもの。

1995. 2/1 アメリカ国務省が世界各国の人権状況をまとめた年次報告を発表。中国については、反体制活動家に対する人権侵害を指摘、人権侵害として「長期の拘置、拷問、囚人虐待」などがあると書いている。

1995. 2/15 李鵬が、国務院で反腐敗闘争の強化をよびかける。「幹部は身边をきれいにせよ。職権を利用した犯罪の摘発を強めよ。幹部の公私混同をいましめよ。」

1995. 5/2 香港の「EASTERN EXPRESS」が、劉正威貴州省前党委書記が自殺したと報道。妻の汚職事件を苦しむらしい。劉前書記の妻は、横領・贈賄の事件で逮捕され、1 月に処刑されていた。

1995. 5/3 香港中国通信社電は、劉前書記の自殺報道を事実無根と報道。

1996. 2/6 偽札密輸事件判決。建国以来最大といわれた偽札密輸事件で、5 人の死刑が確定。この事件は、台湾で密造した偽札を密輸、広東省などで中国人に売却していたもの。偽札総額は 3700 万元にのぼった。

1996. 2/15 密告者の保護規定。中共中央規律検査委員会と国務院監察省が、「密告・告発者の権利保護に関する規定」を公布。規定は、「党組織・党員・国家機関の違反行為を密告・告発できる」としている。

1996. 2/28 戒厳法を公布。3 月 5 日からの第八期全人代第四回会議の開幕を前に、常務委員会で「戒厳法」を審議。1989 年の天安門事件を踏まえての武装警察による強制措置を強化する内容。3 月 1 日に採択され、即日公布。

1996. 3/12 全人代、治安悪化・犯罪摘発に批判。開会中の第八期全国人民代表大会第四回会議で、任建新・中国最高人民法院院長が治安の悪化・犯罪の急増を報告。報告は、去年、法院が扱った刑事事件は約 50 万件で、前年比 2.65% 増。汚職事件は約 3 万 3 千件で、同じく約 7% 増。高級幹部 35 人を含む約百人が死刑を含む判決を受けている。

私は法律の専門家ではないが、こうした記事を見ていると、汚職・横領・贈収賄に格別厳しい刑、死刑が常時行われていることに気づく。それは一定の罪に一定の罰の基準があつてなされているとは到底思えない。中央権力の意向によって断行されているものと見える。換言すれば、中国人は法によって守られていない。ほんのささいな罪でもどのような刑罰

に処せられるのか予測できない不安におびえねばならない。これに比べれば、日本人は、法によってはるかにしっかりと守られている。

中国も1997年2月に、ようやく近代的な刑法が制定され、罪刑法定主義の国家へと歩み出したようであり、日々、判例が積み重ねられつつある。だが、その道が容易でないことは、^{こんにち}今日のニュースによっても知ることができる。

2 中国人にとっての家族—血族至上主義—

2の1 自己の生命そのものとしての家族

加地伸行『儒教とは何か?』(中公新書、1990.10)によれば、儒教は死後の世界への見通しを示して、死の問題を解決している、だから儒教は宗教である。儒教の中心徳目「孝」とは、父母への敬愛・祖先の祭祀・子孫を生むことの三者をひっくるめたもの。自分の生命は、遙か昔の祖先の生命であり、自分の生命はまた遙か未来の子孫の生命でもある。「孝」により、自己の生命は未来永劫のものとなる。それが、儒教における死の問題の解決方法である。だとすれば、家族こそは、中国人にとって永遠の生命(現世の生命・死後の生命・過去から未来への永遠の生命)を保証するかけがえのない存在である。

【家族の意味—過去の文献に見る例】

中国人にとって家族が何よりも重要な存在であることを示す例として、必ず挙げられるのは次の『論語』子路篇の一節である。現代語訳を示す。

楚の葉公^{しやこう}が孔子に話していった、「我々の村に正直一方の者がおりまして、父がよその羊を盗んだのを、子どもが証人になって有罪にしました」と。すると孔子はいった、「我々の村の正直な者はそれとちがっています。父は子のためにかばい、子は父のためにかばいます。正義は、その中にあるのです」と。

孔子は、法律を守るよりも身内を守ることが大切だといっている。人治か法治かということでも、いつもひきあいに出される文章である。上にも述べたが、中国は今もこの問題——人(時の統治者)の判断により処罰するのか、法(罪刑法定)により処罰するのか——を抱えている。

また『孟子』尽心上にも次のような文が見える。

孟子の門人^{とうおう}の桃応が、もし舜の父親が人殺しをしたら、舜はどうするかと問うと、孟

子は「役所が親を捕えるまでだ」という。門人が、「舜はそれを差し止めないのですか」と問うと、孟子は、「舜だとして法を勝手に曲げることはできない」という。門人がそこで、「舜はどうするでしょうか？」と三度尋ねると、孟子は答える。「舜は天下を棄てることを、破れ草履を棄てるも同然と考え、天子の位を棄てて、ひそかに父を背負って逃れ、天下の果ての海辺に隠れ、一生喜んで父に仕えて楽しみ、天下のことなどは忘れてしまおうだろ」。

殺人者の父であっても、父を守るのに比べれば、天子の位などは破れた靴のようなものなのである。

家族を法よりも国家よりも重んずる考え—いわば家族(血族)至上主義が、この二つの文章にはっきり現れている。

この思想が影響して、中国では清朝に至るまで、子は父の罪を隠すことが望ましく、これを暴いたり、親の罪を立証したりすれば、逆に子が罰せられる規定が存在していた。

『大清律例』*「親属相為容隠」条に、「凡そ同居するものは、大功(九ヶ月の喪服を着る親族)以上の親及び外祖父母、外孫、妻の父母、女婿の若き、孫の婦、夫の兄弟及び兄弟の妻の若きは、罪有るも相い為に容隠す。……」とあるように、親族の犯した罪を隠すことは、法によって認められていた。逆に、親族の罪を告訴すれば、『大清律例』「干名犯義」条に「凡そ子孫の祖父母・父母を告し、妻妾の夫を告し及び夫の祖父母・父母を告する者は、杖(竹を貼り合わせた板でたたく)一百、徒(駅通[馬つぎ場]に配して労役に服させる)三年」とあるように、罰せられたのである。

*『大清律例』については、四国大学の喜多三佳氏のご指教を賜った。記して感謝する。

中国は一九九七年によりやく近代的な刑法を制定した。その後、罪刑法定主義の国家＝法治国家たるべく判例を重ねているようだが、なおかつ、法治国家となるには、長い時を要するように見える。

2の2 家族至上主義の実例

また、昔にもどる。家族(血のつながった身内)を何よりも大切すること、そのために判断を誤り、そのために主君を棄て、そのために、命かけて諫言し、そのために自己の思想をも抑えたわめる……、こうした例は、中国においては枚挙に暇がない。

【李斯の誤ち】

例えば、秦の丞相だった李斯が子孫を思って判断を誤っている。李斯の一家は幸福だった。長男の李由は、三川の守(長官)となり、李斯の息子たちはみな秦の公主を妻にむかえ、娘たちはすべて秦の公子に嫁入りした。だが始皇帝が崩御すると、李斯の一家の運命が変わる。始皇帝の長男は扶蘇、第十八子が胡亥。始皇帝の遺言は、扶蘇に葬礼を主宰せよというものだった。しかし、宦官の趙高は、胡亥を立てて自分の権力を確立しようとして、李斯に相談をもちかける。「私の計画を聴くなら、あなたの家は永久に大名に封ぜられ、子孫代々はその栄光を引き継ぐだろう」。李斯は趙高のいいなりになる。趙高は始皇帝の遺書を書き変えて、「扶蘇は自殺せよ」という内容にし、胡亥が即位して二世皇帝となる。後は、すべてが趙高によって決定されるようになる。やがて、趙高は、李斯と李由は共謀して謀叛をたくらんだとでっちあげて、一族とつきあいのあるものをことごとく投獄。李由は殺され、李斯も五つの刑(入れ墨、鼻をそぐ、両足をくるぶしから斬る、鞭でたたき殺す、首や塩づけにした肉・骨を市場にさらす)を加えられた上、咸陽で腰斬の刑に処せられた(『史記』卷八十七列伝卷二十七「李斯列伝」)。

これは、親が子供のこと、一族の末代までの繁栄を考え、それによって判断を誤った例である。

【李陵の翻心】

漢の将軍だった李陵が匈奴の地に命を終えた話はよく知られている。李陵は武帝の時の将軍。わかい頃、800騎をひきいて匈奴との戦いに赴き手柄を挙げて、武帝の信任を得る貳師将軍が匈奴討伐に出兵するが成功しない。そこで、李陵は、「臣少^{しやう}を以て衆を撃^うたんことを願う、歩兵五千人にて單于^{ぜんう}(匈奴の王)の庭に渉^{わた}らんと」と上奏すると、天子はこれを壮として許した。李陵の率いる軍は獅子奮迅の働きをするのだが、匈奴の騎馬兵三万がこれを取り囲み、さらに八万の兵が李陵の軍を攻める。李陵は、数千人また数千人と敵を殺すのだが、終に力つきる。李陵は一旦は自殺しようとするが、生き延びて都に帰り、武帝のために働いて雪辱を果たそうと決意して、匈奴の捕虜となってしまう。武帝はこれに立腹。司馬遷は李陵を弁護したが、武帝は司馬遷を腐刑とし、李陵を罪することとする。李陵が匈奴の捕虜となって一年余り、天子は将軍公孫敖^{こうそんこう}を遣わして李陵を取り返そうとした。しかし、敖は失敗して帰ってきて武帝に報告する。「生け捕りにした匈奴がいうには、李陵は匈奴の王の軍隊に兵法を教えて、漢軍に備えているということです」と。武帝はこれを聞いて、李陵の一族を誅滅、母も兄弟も妻も子もみな殺された。だが、実際は、李陵ではなく李緒という男が匈奴の兵に戦技術を教えていたのである。李陵は武帝のこの仕打ちが

あって、匈奴の娘を妻とし、匈奴に在ること二十余年、匈奴の地に病死した(『漢書』卷五十四)。

この話は、李陵の悲劇を伝えるものとして、また司馬遷の悲劇の原因としても有名。一人の罪を一族に及ぼすのは、中国人にとって家族がどんなに強い絆で結ばれているかを示す。一人でも生かしておいては、その一人が家族のために命かけて復讐しようとする、その可能性を絶つためである。逆に、家族をないがしろにされる時、それまで張りつめていた皇帝に対する忠義の気持ちも、ぷつぷつと切れる。家族こそが、中国人の生きがいの最も根源的で譲ることのできないものなのである。

【李泌の諫言】

『資治通鑑』貞元三年には、名宰相李泌^{りひつ}が、親子の血のつながりのかけがえのなさをもって、天子の愚挙を諫める話が見える。李泌は、徳宗が自分の実子を疑って、甥を皇太子にしようとした時に、そのように実子をさえ疑うようでは、皇室は維持できない、唐王朝はこれで終わりだと諫める。李泌は、この時、「もし自分が諫言しなければ、陛下はいつかきっと、私が不忠だったということで、私の子供を殺すでしょう。そうすると、私は、甥を後嗣ぎに立てるしかなくなる。私は子孫にちゃんと祭ってもらえるかどうかわからなくなります。こんな悲しいことはありません、だからこうして、必死に本音で、諫言しているのです」といって、徳宗を諫めている。

中国人の魂にとって、直系の子孫に永遠に自分を祭ってもらうことが、どれほど存在の根本に関わる重要な事柄であるがよくわかる一段である。

以上は古典に記録されている、中国人の家族(血族)至上主義を示す例である。このような例は、いつの時代にも、どこでも無数にあったろうし、今もあるだろう。現代の例を一つだけ付け加える。

【蒋介石と蔣経国】

台湾の今日を考える上で、蒋介石の息子の蔣経国(1909~1988)という人は KEY PERSON である。簡単にいうと、蒋介石の国民党独裁の戒厳令国家を、世界でも有数の経済力を持った民主国家へと変えた人物である。私は、この蔣経国に、やはり、家族を重んじ、孝を重んじる中国人の生き方が現れていると思う。

蔣経国は、1909年、蒋介石と毛福梅の子供として生まれる。1925年~1937年、ソ連に留学。ソビエト共産党とスターリンの洗礼を受ける。彼は共産主義者であったはずである。しかし、1949年、父とともに台湾に渡り、蒋介石の忠実な部下として、軍と特務機関を掌

握し、蒋介石を支え続ける。以後の出来事を極めて簡単な年表にしよう。

1975年4月、蒋介石は、老衰で死去。蔣経国が国民党主席に就任。

1978年3月、蔣経国が総統に当選。

1984年5月、李登輝を副総統にする。

1987年7月、40年来の戒厳令を解除。

1988年1月、蔣経国死去。李登輝が総統に就任。

(以上、年譜は、戴国輝『台湾』[岩波新書、1994.10 第17刷]による)

父蒋介石に従って台湾にわたり、蒋介石の専制独裁を完成したのは蔣経国である。しかしまた、40年にわたる戒厳令を解除し、李登輝を総統としたのも蔣経国である。蔣経国が父の死まで、父と一体となって独裁体制の完成に尽力したのは、多分、「孝」の観念が大きく働いていたろう。彼は、おそらく、父の生き方に反発する思想を持ちながらも、巨大なる「孝」の観念の伝統＝中国人の家族観にしたがい、蔣一家の支配体制を完成させたのである。

なお、金美齡氏の次の話は、やや複雑だが、私の見方に近い。

「台湾の現代史の中で、蔣経国という人はよくわからない人、位置づけの大変にむつかしい人といえるのではないかと思います。共産主義を信奉し、自分の母親毛福梅を捨てた父親を怨んでいた彼が、共産軍に敗退した蒋介石について台湾まで落ちのびたことも、納得のいく話ではありません。李登輝さんは、蔣経国が自分を後継者にしたかどうかはわからないと述べています。しかし、一方李さん以外の誰かを後継者にしようとした痕跡もまったくありません。「蔣家の人間はもう総統になってはならない」という発言もあります。恐らく、父親である蒋介石に対して非常に愛憎併存的(アンビバレント)な感情を抱いていたものと思われます。それにもう一つ確かなことは、父親が死んで、自分の代になった後、父親の遺臣たちに対して、継母宋美齡がニューヨークからリモート・コントロールすることを非常に嫌ったということです。これらのことは結局台湾にとって有利に働いたと思います」(深田祐介・金美齡『鍵は台湾にあり!』[文芸春秋、1996.3])。

以上、中国人にとって、昔も今も変わることなく、家族が何よりも重要であることを述べた。

【日本の家族】

では日本の家族はどうか？このことについて、私は、中国のように明確なことをいえ

ない。日本人もちろん、家族を大切にする。だが、その重要性は、中国でのように血のつながりを最重要軸とするものではないようだ。家族というよりも「家族制度」という枠を重視するのが日本の特徴だろう。そして、その家族は、今日ならば、より大きな家族＝会社に包摂され、時として、会社＝大家族のしきたりや風習に、個々の小家族が従属するような様相をも呈する。このことについては、中根千枝『タテ社会の人間関係―単一社会の理論―』（講談社現代新書 105、1967.2 初版第一刷、2001.2 第 105 刷発行）が参考になる。邱永漢も、「日本人にとっては、会社という家が、自分の家の上にある」（『中国人と日本人』[中央公論社、1993.3]）と言っている。

3 結論

以上、古代から現代に至る、中国人の生き方を決定していると思われる二つの要件を述べた。国家権力の無慈悲と恣意性から身を守り、家族は何としても生きぬく、「活下去(生きぬくのだ)」これが中国人の生き方の核心である。以下、今日の中国人の生き方をやや具体的に記し、日本人の生き方にも触れておきたい。

国家（最大最強の家族）の無慈悲と恣意性を前にしては、関係のない他人のことなどを考えては生きていけない。他者は、どういう存在か？権力は余りに強く残酷で、人の数は余りにも多い。他者とともに生きるというヒューマニズムは、現実を貫くことが難しい。他者が自分を陥れることもしばしばある。

権力の力が、あるいはわがままが、直接、自分たちに、縦の関係で襲ってくるからして、他の人間についても、どのように権力とつながっているのか、縦の関係でその位置を正確に判断することが重要になってくる。

相手がどういう人物かということをよく見抜いて、力が無いと見れば、横のレベルで、例えば同じ職場の同僚とやりあっても、それは被害を及ぼすことは少ない。

敵と見方をはっきりと見抜き、力関係を見極めた上で、激しく自己主張することは、歴史が彼等に与えた本能であり、そうでなければ生きていけない。「不談政治」という言葉があるが、それは彼らにとって「政治」——権力の所在、それと誰がどうつながっているか——こそは、生きていく上で最も重要な問題だからである。

日本はこれと反対である。幕藩体制について見たように、一定の範囲の共同体の自立性が高い。そこでは、横の和が大切である。仲間同志の助けあいが、生きていくことを保証する。日本人は、いつもほほえむことにより、仲間であること、共同体の秩序を守る一員

であることを確認する。これを粉碎し、無慈悲に切り刻む、中国のような、強大な権力が、日本にはないからである(私の知る限り、戦前の昭和の一時期を除いて)。

中国人にとって、何よりも大切なのは家族(血のつながった身内)である。家族が結束し、家族の味方を増強しつつ、国家の無慈悲と恣意性を乗り越えて、家族の繁栄をはかる。「活下去！」生き抜くのだ！これが中国人の生き方であり、人生観である。国家権力もまた、歴史の大部分において、ある家族が牛耳ってきた。皇帝である彼等自身が、己の一族の繁栄のために、全力を尽くしてきたこと上に述べた。

その際、家族だけでは生き抜けない。「関係」の網の目を広げ、信頼できる「朋友」を多数持って、家族が生き抜く力を強めなければならない。家族と朋友とが、強い関係を保持し、一致団結して、権力者あるいは権力に近い有力な人物と結びつき、縦の柱を太くし、さらにまた関係を広げ強める。これが、中国人の生き方である。

中国人はこの三千年来の教訓を内化し、その精神構造の中に組み込んでいる。どんなにおだやかなように見えても、あるいは十歳にも満たない少女であっても、彼らには歴史的に形成されたこの精神が宿っている。この強靱なる精神を持って彼等は生きている。

彼等の人生の厳しさと、家族の繁栄への思い入れの深さ。これを理解することによって、中国人とのつきあいは本物になる。私はそう思う。

江沢民以後の中国は、集団指導体制を強めつつあるようだ。また、独りっ子政策の結果、家族のありようも、従来とはちがってきているだろう。この変化が、中国人の生き方に、どのような影響を与えているのか、それは時間をかけて拝見し、体験してゆきたい。

附記：1996年5月、講演「中国人の人生観」(1996年5月18日実施、帝塚山学院大学国際理解研究所主催、於大阪狭山市 SAYAKA ホール)のために発表草稿を記す。2010年8月、『東北アジアの幸福観』[岡山大学出版会、荒木勝・下定雅弘・山口和子編、2011.3]に掲載すべく文章化するも、他の編集委員の判断により掲載せず。2012.2.12 補正。2012.3.9 再度補正。

余談：1996年5月の講演での話から

皇帝や宰相といった、権力に関わる人達の厳しい話を主にしてきましたが、身近に知る例では、たとえば、中華料理の周富徳とその一家、弟も料理の名人で、息子も料理人としての修業をしています。今回、このお話をするので、最近出た本を書店に見にいきましたが、もう出ておりませんでした。彼らのご存知のように、一族こぞって、政界・芸能界を初めとする各界の人たちと、人間関係を強めるように、自然に暮らし、活動内容やスケジ

ユールを決めていっていると思います。

また、わたし自身の経験を申しますと、本学(帝塚山学院大学)は、北京大学・蘇州大学と交流協定を結び、隔年に二つの大学から交互に客員教授に来ていただいています。本学からは、学生を留学生として派遣しています。この、去年、北京大学から来ておられた先生の息子さんは、今年、立命館大学の経営学部に入られた。その費用は、先生が日本に来られた時の給与をためたものなんです。

息子さんは、去年は梅田のほうにある日本語学校に通っていました。それが加島のほうに引っ越すことになり、その住まいとか生活の様子を去年の夏お盆の頃に見にいったのです。すると、これは去年9月13日づけの手紙で、「8月14日、酷暑を犯して息子に会いにいくてくださったこと、本当に感謝しています。わたしたちの間の兄弟と同じような感情を改めて確認した次第です」といってこられた。また、日本語学校の成績がトップだったので立命館大学には推薦で入れたのですが、その時の志望動機書類などは、私が手伝って完成しました。すると、今年1月の手紙ですが、「息子へのあなたの真誠の関心と援助に心から感謝します。この兄弟と変わらないお気持ちを本当にありがたく思います」といってこられています。

それから、またこの息子さんは、親孝行な息子であって、いろんなことを、よく電話をかけてご両親が心配しないように気をつけています。これはつい先週のことで、京都で研究会があり、その帰り、授業が終わって帰る息子さんと、西院の駅でばったりあいました。で、十三までの電車の中をずっと話すことができました。おかげで、入学してからどうしているのか気になっていましたが、元気で暮らしていることがよくわかって、安心しました。2、3日後に、北京大学に留学させる帝塚山学院大学の学生のことで電話したら、もうちゃんと、この息子は父親に、私と京都であったことを電話で話していました。

また、蘇州大学から3年前に来ておられた、女性の先生は、これは、蘇州大学は給与のうちのかなりを蘇州大学に納めなければならない規定になっていて、日本での生活は相当苦しいのです。しかし、その中で、まさに爪に火をともし、赤貧洗うがごとき生活をして、かなりの貯蓄をされた。今、その金をもとでにして、息子さんを日本の日本語学校にやり、できれば、日本の大学に進ませたいと、私に相談をしてきておられます。

こういうことで、中国人の生き方をじかに知ることができます。親の子に対する思い入れ、子の親に対する愛情。そして、援助者をしっかり作っていくためのたゆみない努力。

日本は、最近、経済大国となり、日本をパラダイスのように考える中国人は少なくあり

ません。特に、過去、中国という国家の見方からして、あまりかんばしくない経歴があり、中国での将来に明るい見通しを持ってない人は、日本での生活に活路を求めたりします。我々もまた、中国人にとっての、貴重な関係と朋友の対象です。中国人は、この厳しいたくましさ、したたかさでもって、我々に接近してきます。ここでは言えませんが、過去のそういう経歴を隠して、私との関係を深めようとした中国人もいます。その人との関係は、それがわかった時に断ち切りました。

中国人のそういう、厳しさ、たくましさ、あるいはしたたかさ、それを知って、我々は、我々の誠実さと真実をもって、彼等とつきあっていく。そうすれば、続くものは続き、歳月を経るほどに深い味わいのある関係となってゆきます。ほんとうの関係・ほんとうの朋友となって、個人としても、また日中両国にとっても、たしかな未来に向かって発展する関係が築かれていくのだと思います。彼等の人生の厳しさと、家族の繁栄への思い入れの深さ。これを理解することによって、中国人とのつきあいは本物になるのだと思います。